上原美術館通信

No.
22

編集・発行　公益財団法人上原美術館
2023年7月14日発行(季刊年4回発行)
公益財団法人 上原美術館
〒413-0715 静岡県下田市宇土金341
Tel. 0558-28-1228
www.uehara-museum.or.jp

［仏教館］企画展　きれいな仏像 愉快な江戸仏
2023年4月29日（土・祝）～9月24日（日）　会期中無休

企画展『きれいな仏像　愉快な江戸仏』は二部構成の展示会です。「きれいな仏像」では、新収蔵の阿弥陀如来像（次頁参照）を初公開するほか、平安時代の十一面観音像、二天像などの当館所蔵の仏像と、松崎町吉田寺に伝えられた鎌倉時代の阿弥陀三尊像、毘沙門天像（静岡県指定有形文化財）など、寄託保管している伊豆の仏像を展示しています。いずれも平安～鎌倉時代の像で、古く、造形的に優れた貴重な文化財です。

一方、「愉快な江戸仏」の部屋では、伊豆の寺院やお堂に伝えられた、27体の像を展示しています。上原美術館の前身、上原仏教美術館は、1983年5月29日の開館間もなく伊豆の仏像の調査に着手。現在まで40年間調査を継続しています。その間、多くの平安、鎌倉時代の貴重な仏像を見出し、成果を企画展や出版物で公開してきましたが、時代が新しく、作者や造像事情が不明なものが多い江戸時代の仏像については、ほとんど紹介してきませんでした。これは当館に限らず、他の多くの美術館、博物館も同様であったと思われます。

本展の「愉快な江戸仏」では、従来紹介されることの少ない江戸時代の仏像を主役に据えた、小規模ながら実験的な展示会です。江戸時代の仏像のうち、今回は、名もない作者の手になる、造形的には拙いかもしれない、でも真摯な信仰を感じる仏像、あるいは素朴で愛らしく、愉快で、親近感を覚えるような魅力的な像を厳選して展示しました。

表紙の狛犬は、南伊豆町加納の保春寺境内の天満宮の左右を守る、阿吽一対のうちの阿形像です。南伊豆一帯は伊豆石と総称される石材のうち、降り積もった火山灰が地下の高温高圧で岩となった、凝灰岩の産地です。伊豆の凝灰岩は軟石と呼ばれ、軟らかく、加工が容易なため、石倉の壁や、敷石、石段、石仏、石臼などに用いられました。保春寺の狛犬はこの軟石を用いたもので、像の全容を一つの石材から削り出しています。地元の石工が造ったものでしょうか。あばら骨の浮いた胴は細長く、細い両足を突っ張って起き上がるものの、前方を睨み据える威厳ある姿とは程遠いようです。大きな頭部には丸く小さな耳があらわされ、歯をむき出す表情は、悪戯を考えているようで、何ともユーモラスです。本像は2012年5月16日、南伊豆町教育委員会の依頼で行われた保春寺本堂内の仏像調査の帰り、ふと目に留まった像。なんともいえない愛嬌に魅了され、11年後の今回、展示しました。

地蔵菩薩像（江戸時代）河津町田中地区、小峰堂蔵

河津町田中地区、小峰堂の地蔵菩薩像（写真）は、2015年5月26日の調査で出会った像。像高15.2cmで、掌に納まる小さな石像です。地元産の沢田石（凝灰岩）を三角錐型にざっくりと成形し、丸く大きな顔に簡単な目鼻を彫っただけの姿。拙く、素朴そのものの造形ですが、何とも愛らしい像です。長年線香の煙に燻され、真っ黒ですが、裏を見ると、沢田石特有の若草色の石肌を見ることができます。

伊豆の愛らしい仏像や神像に会える展示。是非ご来館ください。

（田島）

［コラム］新収蔵品紹介　阿弥陀如来像
主任学芸員　田島 整

今年3月、上原美術館は、新たに鎌倉時代の阿弥陀如来像を収蔵しました。

時代の波が大きく揺れ動いた平安後期から鎌倉時代は、相次ぐ戦乱と政治的混乱、飢饉や大地震、疫病の流行などで、社会不安が高まった時代でした。こうしたなかで阿弥陀如来は、貴賤や性別、罪の軽重を問わず、信仰する者を極楽浄土に迎え取る仏として、信仰を集めました。またこの時代は、皇族や貴族のみならず、武士や富裕な庶民までもが仏像を造像、あるいは造像に結縁した時代。このような背景から、鎌倉時代には、従来より小型の、像高三尺の阿弥陀如来の立像が多く造られました。本像は像高79.1cm。一尺を30.3cmとする現在からみると小柄ですが、古い時代に用いられた、より小さな尺寸による三尺像です。

本像の顔は引き締まって理知的、衣の表現も写実的で、鎌倉時代の仏像の特徴をよく示しています。螺髪（頭髪の巻毛）が大粒で、頭の鉢が左右に張って四角く、肉髻（頭上の盛り上がり）を低く潰れたようにあらわすのは、中国宋時代の仏像の特徴を取り入れたもので、やはり鎌倉時代の特徴です。

構造は、頭体を桧の縦二材を前後に寄せて造る寄木造りの像で、両肩以下の袖や両手首先、両足先を別に造ってとりつけています。また、頭部を首の下で一度割り外し（割首）、目には内側から水晶製の玉眼を入れています。

本像で重要なのは、体内に願文（造像の趣旨や願いが記された文書）が納入されている点です。願文は縦14.5cm、横13.0cmの紙片で、表に13行、裏に3行が墨書で記されています。それによると本像は、文永七（1270）年七月三日に、僧蓮願の発願によって造像されたことが分かります。このように制作年代が確定できる仏像は、圧倒的多数を占める制作年代不明の像の年代を考える際の、物差しとなる基準作で、本像は学問的に貴重な仏像です。

阿弥陀如来像（鎌倉時代、文永七［1270］年）

※本像は仏教館企画展『きれいな仏像　愉快な江戸仏』にてご覧いただけます。

ミニブック発行のお知らせ

企画展『きれいな仏像　愉快な江戸仏』開催を記念し、ミニブック『愉快な江戸仏』を刊行いたします。
伊豆南部に伝わる、小さくても個性的で愉快、可愛い、仏像や神像26体を紹介するミニブックです。
カラーページの解説は、仏像好きアナウンサー、インフルエンサーとして、テレビやラジオ、各地のイベントで活躍中の久保沙里菜さんにお願いしました。
従来の図録とは一味違う、愉快なミニブック。8月中旬の発刊に向け、今、準備中です。

久保沙里菜さん

詳細はお電話（0558-28-1228）、またはEメール（info@uehara-museum.or.jp）にてお問い合わせください。

［近代館］ 上原コレクション名品選 **雨をたのしむ**

2023年4月29日（土・祝）～9月24日（日）　会期中無休

近代館にて開催中の展覧会『雨をたのしむ』では、収蔵品から雨をテーマに描かれた作品をご紹介しています。今回展示している絵画には、大正製薬名誉会長・上原昭二氏の両親である上原正吉・小枝夫妻が好んで収集し、愛蔵していた日本画も展示しています。お二人は日本画を好み、季節に合わせて収集した美しい花や風景、美人画などを自宅に飾り楽しんでいました。なかでも日本画家・松林桂月（けいげつ）の作品を好み、本展に展示中の桂月《牡丹》(図)もお気に入りの一点でした。

図　松林桂月《牡丹》昭和30（1955）年頃

《牡丹》は線描を用いず、描いた墨の上に水墨や胡粉（ごふん）（白い絵の具）を重ね、雨に潤う牡丹のようすを巧みにとらえた作品です。葉の上に落ちた雨粒は、牡丹の花、葉、茎の重なりを曖昧にぼかします。そして墨の濃淡による不明瞭な葉や茎の重なりは、やわらかな情趣を創り出しています。さらに葉や花の縁（ふち）に墨を寄せることで、やわらかさのなかに張りのある、桂月独自の味わいが生み出されています。右上には「桂月山人寫於桜雲洞中」とあり、大正14（1925）年から桂月が使用した画室「桜雲洞」で制作されたことが記されています。

明治9（1876）年に山口県萩市で生まれた桂月は、幼いころから絵に親しみ、漢籍詩文を習いました。18歳の時に上京し、画家の野口幽谷（ゆうこく）に南画を学びます。入門してからわずか4年ほど経過した明治31（1898）年に幽谷が没した後は、ほぼ独学で南画の道を究めた稀有な人でした。

南画は江戸時代に盛んに描かれ今も継承している絵画様式です。中国から伝来した「南宗画（なんしゅうが）」に由来する南画は、漢詩が添えられることも多く、水墨または淡彩で描かれています。桂月は詩とそれにふさわしい書体、詩の世界の絵画化、これら全てが調和してより高めあう「詩書画三絶」を理想として掲げ、独自の南画を確立しました。桂月が本作《牡丹》を描いた戦後は、漢詩の理解者が減少し、南画離れが進んでいました。加えて、日本画壇では西洋画の影響を受けた厚塗りの日本画が台頭しており、漢文を添えた水墨画主体の南画にこだわり続けた桂月は「最後の南画家」と呼ばれました。流行を追わず、伝統を重んじながらも独自の要素を加え描かれた桂月の作品は、気品あふれる優美さを放っています。

『雨をたのしむ』では、古くから上原コレクションを彩ってきた桂月《牡丹》をはじめ、新収蔵である鏑木清方（かぶらききよかた）《初冬の雨》、《待乳夜雨（まちよさめ）》、《木母寺夜雨（もくぼじよさめ）》を初公開しています。この3作品は全て掛け軸の作品ですが、描かれた雨を直接感じていただきたい、という思いから、展示ケース等に入れず、壁に掛けて展示しています。露出展示ならではの空間の広がりや清方の繊細な運筆による雨で濡れた世界を堪能することができます。新旧の上原コレクションに描かれた「雨」の表現をどうぞお楽しみください。　（土屋）

展示室のようす

［コラム］ **クーリエの仕事──絵画を運ぶ**

主任学芸員　土森智典

美術館のあまり知られていない仕事の一つにクーリエ業務があります。クーリエ（courier）は、古くは手紙や公文書などを運ぶ人という意味があり、美術館の世界では作品搬送の安全を確保する作品同行者のことを言います。

現在、シカゴ美術館では『ゴッホとアヴァンギャルド──近代の風景』展が開催されています。この展覧会はセーヌ川沿いの街で新たな芸術を生み出したゴッホと友人の画家たちとの交流を紹介する意欲的な企画です。本展はゴッホ美術館をはじめ世界各地から名品約75点が集結しています。当館からはシニャック《アニエール、洗濯船》を出品しました。

貸出において最優先すべきは作品の安全性です。まず作品が長時間の輸送に耐えられる状態かを確認します。シカゴ美術館から当館に初めて問い合わせがあったのは2021年のことでした。その頃はちょうどコロナ禍の只中、クーリエが同行できない場合はどのように対応するか検討を重ねて交渉、契約手続きを進めました。一般的にクーリエを含む輸送・保険費用は借用側が全て負担します。貸出時期の2023年4月には渡航条件も緩和され、クーリエが同行できることとなりました。

海外輸送では飛行機、屋外倉庫など作品が過酷な環境に置かれることもあるため、確実に作品を保護できるようウレタン、発泡スチロール、防水シート、板を二重にしたクレート（木箱）を作成します。梱包直前には作品の状態を調査しコンディション・レポート（作品調書）に詳細を記入、問題がなければ状況を逐次チェックしながら梱包します。

作品を梱包したクレートは事前に保税蔵置所に指定された専門業者の美術品倉庫で保管し、通関手続きを行います。出発当日はクーリエが同行し羽田空港へ搬送、貨物エリアでクーリエ立ち会いのもと航空機用パレットに積み込みを行います。その際にもクーリエはクレートの積み方、パレット番号の確認等、細やかな注意を払います。

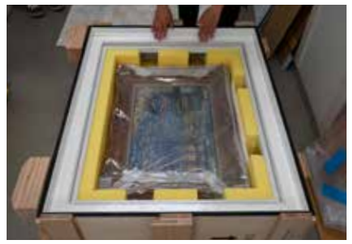
パレット積載後、クーリエは作品と同じ飛行機に搭乗します。12時間のフライト後、シカゴ・オヘア空港でアメリカの輸送業者と合流、そのまま貨物エリアで作品の受け取りに立ち会い、美術品専用車両でシカゴ美術館へ向かいます。シカゴ美術館への到着は日本の美術品倉庫を出発して21時間後のことでした。到着後は展示室に作品を搬入。温湿度の変化もあるため、すぐには開梱せず、数日間そのまま保管します。今回は到着3日後に開梱・展示を行いました。

日本の美術館では一人の学芸員が様々な業務を行いますが、海外美術館では業務が専門分化しています。作業全体の進行管理は作品管理担当のレジストラーが行います。作品を開梱すると、作品保存を担当するコンサバーターとクーリエが双方でコンディション・チェックを行い、搬送による損傷がないか確認します。問題がなければ、企画担当のキュレーターやレジストラーが展示専門業者とともに展示作業を行います。その際、クーリエは作業の手順、使用する展示具、防犯器具の確認をします。展示状況を確認して、問題がなければクーリエは作品を引き渡します。

国際的な展覧会では世界各地から作品が集まり、その都度、同様の作業が行われます。その後、主催館がキャプション設置、照明作業、デザイン調整を行い、初めて展覧会が開幕します。こうしたクーリエ業務に携わると、一つの展覧会が世界中の多くの人々の協力のもとに成り立っていることを改めて実感します。

展覧会は秋にオランダ・アムステルダムのゴッホ美術館にも巡回します。機会がございましたら、ぜひご覧ください。

Van Gogh and the Avant-Garde: The Modern Landscape
- Art Institute of Chicago
  14 May 2023 – 4 September 2023
- Van Gogh Museum, Amsterdam
  13 October 2023 – 14 January 2024



作品を梱包するクレートの点検

シカゴ美術館でのコンディション・チェック

シカゴ美術館における展示作業

活動報告

ギャラリートーク（作品解説）

開催中の展覧会内容について、担当学芸員が解説を行いました。
展覧会会期中は毎月第３土曜日、近代館は10時より、仏教館は11時より開催しています。
開催時間になりましたら各展示室にお集まりください。（要入館券）

講演

5月24日　「鎌倉武士が愛した仏像」　於：SBS学苑パルシェ校
6月21日　下田市寿大学講座　於：下田市民文化会館

田島主任学芸員がSBS学苑の連続講座『日本人の美意識』中の一講座で鎌倉時代に造られた仏像についてお話しました。また下田市教育委員会の依頼で高齢者を対象とした下田市寿大学の講座で講演をしました。

教育普及

5月17日　河津町立河津小学校出張授業
5月27日　下田市立下田中学校美術部授業入館

河津小学校では４年生を対象に町内の文化財や歴史を学ぶ授業として、田島主任学芸員が河津町谷津区の南禅寺仏像群についてお話しました。下田中学校は美術部の課外授業として学芸員が説明をしながら美術鑑賞を行いました。

展覧会取材

開催中の展覧会『きれいな仏像　愉快な江戸仏』、『雨をたのしむ』を地元ケーブルテレビ局（下田有線テレビ放送、小林テレビ設備、伊豆急ケーブルネットワーク）で取材をしていただきました。下田市内、伊豆東海岸の一部地域でご覧いただけます。
新聞では伊豆新聞、毎日新聞の紙上にて展覧会をご紹介していただきました。

国際博物館の日　5月18日

ICOM（国際博物館会議）では5月18日を国際博物館の日として、多くの方に広く博物館の活動を知っていただき、親しんでもらうイベントを協賛館で行っています。当館もこの活動に賛同し、当日は無料入館として、多くのお客様に美術館をお楽しみいただきました。

上原美術館創設40周年記念　5月29日

上原美術館の前身の一つである上原仏教美術館が下田の地に創設されて今年で40周年となります。5月29日にオープンしたことを記念して当日は無料入館としました。当日は主に地元の方が多くお越しくださいました。

ギャラリートーク（上：近代館／下：仏教館）

教育普及：下田市立下田中学校美術部授業入館

展覧会取材

カタログ発行のお知らせ

「ペリーが見た幕末日本と下田」定価：300円

1856年に刊行された『ペリー提督日本遠征記』の挿絵から幕末の日本や下田を描いた部分、19枚を収録した冊子です。仏像ギャラリーで展示中のミニ展示とあわせてお楽しみください。美術館受付でお求めいただけます。

※詳細はお電話（0558-28-1228）またはEメール（info@uehara-museum.or.jp）にてお問い合わせください。

上原美術館40年のあゆみ

上原美術館は2023年5月29日、開館40周年を迎えました。当館の前身の一つである上原仏教美術館が下田市宇土金の静かな山間に誕生したのは今から40年前の1983年のことでした。

当時、大正製薬名誉会長をつとめた故・上原小枝氏は、自身の故郷である宇土金や伊豆の地域文化への貢献と活性化を願い、上原仏教美術館を創設しました。現在、美術館が駅から遠く、少し不便な場所にあるのは、創設者の地元貢献への思いからでした。

開館した頃の建物は、現在の仏像ギャラリー（大正殿）につながって、小さいながらも展示が出来る展示ロビー、収蔵庫を擁したものが建っていました。仏像ギャラリーの中は今と同じく近現代の仏像が並び、企画展は展示ロビーで行っていました。

この間、仏教美術館は企画展で伊豆のすぐれた仏像や仏教美術を紹介する展覧会を定期的に開催していました。当時の学芸員、山根明氏が行った1990年度特別展「鏡と懸仏」や1992年度の企画展「慶派の仏像とその周辺」のほか、田島整主任学芸員（現職）が2011年度に「伊豆の観音像」や2013年度特別展「伊豆の薬師如来像」などを開催しました。特に「伊豆の薬師如来像」展は大きな反響をいただき、多くの来館者が訪れたことがきっかけとなって、老朽化してきた仏教美術館の建物の整備、リニューアルへとつながります。

さて2000年3月16日には、仏教美術館の隣地に上原近代美術館が開館しました。こちらは大正製薬名誉会長・上原昭二氏の多彩な近代絵画コレクションを収蔵、展示する美術館でした。モネやルノワール、マティス、梅原龍三郎、安井曽太郎、須田国太郎などの絵画から、テーマに沿った作品を季節ごとに公開し、上原コレクションの魅力を引き出す展覧会を行いました。また学校との教育普及活動にも力を入れ、ワークショップや絵画鑑賞を開催し、現在も地域における美術鑑賞教育への活動として続けています。

しばらく両館は別の美術館として活動をしていましたが、2013年に母体となる財団の合併、そして仏教美術館の建物リニューアルに伴い、2017年11月3日に両館を合わせ、東洋と西洋の美術を両方楽しめる上原美術館として、リニューアルオープンをしました。昨年度、2022年はリニューアルオープン5周年を無事迎えることが出来ました。

リニューアルオープン後もさまざまな活動を通じて、地域文化の向上、貢献を目的としていますが、地元文化を大切にし、展覧会等を通じて情報を発信するという考えは、40年前の仏教美術館から始まっています。

仏教美術館は開館当初から伊豆の仏教美術研究の拠点となるべく、継続して地元の仏像調査を行ってきました。これまで勤めてきた何人もの学芸員がこの調査研究を引き継ぎ、40年の間に多くの調査成果をあげることが出来ました。松崎町吉田区の吉田寺阿弥陀三尊像、毘沙門天像、下田市では曹洞院所蔵の薬師如来像や、南伊豆町・青龍寺所蔵の薬師如来像など、当館の調査によって文化財指定につながった仏像がいくつもあります。近年では河津町の悉皆調査によって失われた仏師の作例が新発見され、研究者の間で話題になることもありました。これらは地域の方々、調査先の寺院の皆さま、さまざまな方のご協力や情報提供をいただいたことであらわれた成果でもあります。

次の節目となる50周年にむけて、今後も当館で美術作品と過ごす静かな時間を、多くの皆さまにお楽しみいただけるよう目指してまいります。（櫻井）

1983年5月29日の開館記念写真中央に写っているのは上原小枝氏。

現在の美術館（左：近代館／右：仏教館）

伊豆だより

梅雨時に咲くアナベル。カエルも一休みしている時があります。

美術館の周辺はのどかな田園が広がっています。梅雨時にはアマガエルの合唱が聞こえ、虫をとらえて丸々太ったカエルの姿はどことなくユーモラスです。美術館入口へ向かう坂の途中には白いアナベルが咲き、カエルが休憩していることがありました。

初夏にはたくさんのツバメが飛び交い、美術館の上空にもやってきます。巣立ちを迎えた子ツバメが一生懸命飛ぶ練習をしているのはとても可愛らしく、思わず声援を送りたくなる光景です。濃緑に彩られた山ではさまざまな生き物が住んでいます。美術館の庭や周辺でも小さな生き物たちとの出あいをお楽しみください。

（櫻井）

美術館周辺さんぽ ❹

宇土金地区の鎮守

美術館の第一駐車場から坂をあがる途中に神社があります。境内にはイチョウの木があり、夏には濃緑の葉、秋には黄色く色づいた葉が境内一面に落ち、四季の移ろいを感じさせます。

この神社は宇土金地区の鎮守の日枝神社で、仏教美術館が建てられた頃、上原正吉・小枝夫妻が建物を改修しました。上原夫妻は40年ほど前に、美術館に隣接する向陽寺と日枝神社の建物改修工事をしており、各所に由来が書かれた石碑が建っています。

江戸時代に秋山富南によって書かれた伊豆の地誌『豆州志稿』には、「椎原村、日枝神社を分祀せるなり」とあります。宇土金に隣接する椎原地区の日枝神社から分祀されてきたのがこの神社です。神社には慶長12（1607）年の棟札があり、「奉新造山王廿一社本地蔵薩埵化現也」（『下田市社寺棟札調査報告書Ⅱ』）と記されていることから、この年には社殿を新築し、鎮守として祀られていたことが分かります。今も宇土金地区の鎮守として、地域をさまざまなことから護り続けています。

（櫻井）

上原美術館
Uehara Museum of Art

開館時間
9:30〜16:30
最終入館は16:00まで

休館日
展覧会会期中は無休
展示替え日のみ休館

入館料
大人／1,000円、学生／500円
高校生以下無料　＊団体10名以上は10％割引

表紙写真：狛犬（江戸時代）南伊豆町加納・保春寺　※本像は仏教館企画展『きれいな仏像 愉快な江戸仏』にてご覧いただけます。